



年、オランダはダカールの沖合2kmのゴレ島を占領、奴隷貿易の拠点にした。オランダも奴隷貿易に手を染めていた。この島は、後にイギリス・フランスが領有を争い、1815年のウィーン会議でフランス領(1794年に奴隷貿易を廃止)となり、同島での奴隷貿易は廃止された。現在セネガル共和国。「負の世界遺産」に登録(1978)。

## イギリスの覇権

この時期のイギリスは正式にはイングランドと呼ぶ。

- 1) 1600年、エリザベス1世の命で設立されたイギリス東インド会社は、喜望峯からマゼラン海峡に至る、インド、中国も含む広大な地域での貿易独占権を与えられた。東南アジア貿易への参入を試みたが、1623年のアンボイナ事件以降、【6: 】に集中した。イギリスが再び東・東南アジアに手を伸ばすのは18世紀末以降である。
- 2) イギリスはインドではマドラス(1639)・ボンベイ(1661)・カルカッタ(1690)を拠点に通商活動を展開する一方、1651年以降、3次にわたるイギリス・オランダ戦争に勝利して、17世紀後半以降オランダの覇権を打倒した。しかし、イギリスが覇権国家になったと言えるのは、19世紀であるとされている。途中の18世紀は、インド支配をめぐる【7: 】と戦い勝利した。

## フランス

- 1) フランス東インド会社は、イギリス・オランダに習って、1604年にアンリ4世によって創設された。貿易独占の特許状の期限も切れ、インド貿易も不調のまましばらく放置されていた。ルイ14世が親政を始めてからは、重商主義の国策の一環として重視されるようになり、財務総監【8: 】は、1664年、オランダ東インド会社を模範として会社を抜本的に改組した。
- 2) フランス東インド会社は、インドではボンディシェリ(1674)・シャンデルナゴル(1673)を確保、イギリスとインドの植民地化をめぐる80年以上闘争したが敗れ、インドから撤退、フランス東インド会社も1796年に解散している。19世紀にはフランスの植民地を求める矛先はヴェトナムおよびインドシナ半島に向けられた。

## イギリスとフランス

No.111にまとめたように、ファルツ継承戦争(1688-97)に始まる第二次英仏百年戦争は植民地での勢力争いを伴った。七年戦争(1756-63)の時、インドでは東インド会社の【9: 】がブラッシーの戦い(1757)でフランスとベンガル太守の連合軍に勝利し、イギリス領インドの基礎が築かれた。

## アメリカにおける植民地争奪戦

- 1) ポルトガル領となったブラジルを除き、スペインは、ラテンアメリカの大半を植民地化した。No.94を参照せよ。
- 2) オランダは、1621年、西インド会社を設立し、大西洋での私拿捕、略奪と貿易活動を行い、マンハッタン島に【10: 】を建設(1625)したが、イギリスに奪われ(1664)、ニューヨークと改名された。競争に敗れ、西インド会社も解散した(1791)。
- 3) フランスは今日のカナダに進出、ケベックを建設(1608)して拠点としたが、イギリスに占領された(1759)。ミシシッピ川流域の広大な地域は、1682年、ラ=サールが探検し、【11: 】にちなんでルイジアナと命名された。しかし、七年戦争と同時に戦われたフレンチ=インディアン戦争の講和条約である【12: 】(1763)によって、ミシシッピ川以東のルイジアナはイギリスに、ミシシッピ川以西のルイジアナはスペインに譲渡され、カナダにおける全領土もイギリスに譲渡され、フランスは北米における領土全てを失った。
- 4) 北アメリカ東海岸のイギリス植民地の始まりは、【13: 】(1607)である。スチュアート朝の初代ジェームズ1世位1603-25のピューリタン抑圧に抗して、多くのピューリタンが移住した。18世紀前半までに、13のイギリス領植民地が南北に並んだ。それらは、多様な目的をもつ様々な存在で利害も異なり、当時の入植者たちは、将来アメリカ合衆国を構成するとは、夢にも思わなかったに違いない。

## 大西洋三角貿易

既にNo.95で詳述したように、大航海時代に端を発する大西洋【14: 】とは、奴隷貿易のことであるが、初期における近代分業システムであると言える。18世紀には、ますます多くの国と地域がこのシステムに組み込まれていった。

## 2009 石巻専修大学 経営 抜粋・編集

実問は記号式・記入式混在している

- (4) オランダは1602年に東インド会社を設立して東南アジアまで貿易網をひろげ中継貿易により国力を強めた。オランダは、ジャワ島の【a】(現ジャカルタ)を根拠地に、貿易の実権を握り、のちには【b】を転機にイギリスの勢力をインドネシアからしめだした。また、1652年にはアジアへの中継基地として南アフリカにケープ植民地を築いた。オランダはわが国の「鎖国」の体制が完成した1639年の後も、対日貿易を許された。

イギリスは【c】の時代に積極的に海外進出を行い、【d】年に東インド会社を設立した。イギリスは、インド経営に力をそそぎ、さかんな通商活動を展開した。17世紀後半には3回の対オランダ戦争をつうじて、中継貿易を主とするオランダに打撃を与え、17世紀末には世界貿易の覇権をにぎった。

フランスもインドに進出し、1664年にフランス東インド会社を再建し、イギリスと対抗した。インドの帝国が内紛におちいると、地方の豪族もまきこんだ勢力争いを展開した。ヨーロッパで1756年に起こった七年戦争の際には、インドではイギリスの【e】が1757年の【f】でフランスを破り、イギリス領インドの基礎をきずいた。

- (5) 北アメリカをみると、オランダは1621年に西インド会社を設立し、アフリカ西岸とアメリカとの通商にのりだし、北アメリカ東岸にニューネーデルラント植民地を領有してニューアムステルダムを建設したが、1664年にイギリスがうばい改名した。イギリスは、17世紀初頭、北アメリカ東岸に最初の植民地【g】を設けた。その後、多くのピューリタンが北アメリカに移住し、ニューイングランド植民地が形成され、18世紀前半までにはイギリスの13の植民地が南北にならんだ。フランスは、17世紀初頭以来ケベックを中心にカナダへ進出し、【h】の時代には広大なルイジアナを手に入れた。

18世紀にはイギリスとフランスの争いがくりかえされた。ヨーロッパで1701年に起こった【i】の結果、イギリスは、フランスから北アメリカの領土の一部を獲得した。その後、イギリスは、七年戦争と並行してたたかわれた【j】とよばれるフランスとの植民地戦争に勝利した。1763年のパリ条約において、フランスはルイジアナなど北アメリカにおける領土をすべて失い、ここにイギリス植民地帝国の基礎がすえられた。

正解は巻末「記入例」に掲載